



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 68 号 2016 年 1 月 29 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 23 回大会委員長挨拶>

大野 久：青年心理学会第 23 回大会を終えて

<特集：日本青年心理学会第 23 回大会>

梁 晋衡：第 23 回大会に参加して

風間 惇希：ロングセッションの発表を終えて

竹元 雅也：日本青年心理学会第 23 回大会に参加して

今井 美智子：第 23 回大会を終えて

<書評：私のおすすめ、この一冊>

安東 友子：松本 俊彦（著）『アディクションとしての自傷「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理』

<広報>

ニューズレター電子化のお知らせ

事務局からのお知らせ

<第 23 回大会委員長挨拶>

青年心理学会第 23 回大会を終えて

大会委員長 大野 久（立教大学）

2015 年 11 月 14 日（土）～15 日（日）立教大学を会場に青年心理学会第 23 回大会を開催し、無事、成功裏に終えることが出来ました。これもひとえに参加者の皆さん、学会事務局、理事会、大会準備委員会スタッフ、立教大学職員の皆さんのおかげと感謝申し上げます。両日の参加者は 93 名、懇親会参加者 48 名と参加者の過半数が懇親会に参加して下さる結果になり、アットホームな雰囲気の大会となりました。学会の財政危機に配慮し、今回の大会は、節約第一をモットーに運営しました。そのため、参加者の皆さんにご不便をおかけしたことがあったかもしれません。この場をお借りしてお詫び申し上げます。しかしおかげ様で大会の決算は黒字で終えることが出来ました。ご協力に感謝申し上げます。黒字分はすべて学会の会計に寄付したいと思います。詳細は次回総会時にご報告します。

大会の内容に関しましても、多数の口頭発表のほか、小塩真司先生（早稲田大学）の青年心理学研究法セミナー「使ってもらえる心理尺度の作り方」、国際交流委員会企画シンポジウム「日本青年心理学会における国際交流について」、研究委員会企画シンポジウム「現代青年を取り巻くマンガ・アニメー大学生を対象とした調査データをもとに一」など、現実的な研究の推進方法、現代の国際化の必要性、現代青年世代をとらえる新たな視点の必要性など、up-to-date で考えさせられる問題提起が数多くあり、内容豊富で

実りある議論ができたと思います。不肖私の大会準備委員長講演「アイデンティティ研究の質的方法と量的方法の体系的折衷」もさせて頂きました。今後も青年心理学研究の隆盛、次世代の成長、ひいては学会の発展のため皆さんで力を合わせ進んでいきたいと思っています。

＜特集＞ 日本青年心理学会第 23 回大会

昨年 11 月に立教大学にて日本青年心理学会第 23 回大会が開催されました。あいにくのお天気ではありましたが、青年心理学研究法セミナー、大会準備委員長講演、研究発表、国際交流委員会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウムなどを通して大変刺激的な議論が交わされました。青年に関心を寄せる参加者各々が、自らの課題に向き合うための新たな力を得る機会になったのではないのでしょうか。今回は、若手の参加者の方々から感想などをご寄稿いただきました。ご執筆いただきありがとうございました。

（担当：三好昭子・長峰伸治）

第 23 回大会に参加して

梁 晋衡（中央大学文学研究科心理学専攻）

この度、日本青年心理学会第 23 回大会において、「時間的展望とエージェンシーの観点から見る在日留学生のアイデンティティ発達—交差遅延効果モデルによる検討—」というテーマで研究発表をさせて頂きました。今回の発表は、日本青年心理学会に参加してから 2 回目になります。2 回目とも、身近な雰囲気先生方と交流することができ、私にとって大変有意義な勉強になりました。

私は、青年期から成人期におけるアイデンティティの形成について研究関心をもち、アイデンティティが形成する際に、その促進的な要因は何かを明らかにしたいと考えています。そこで、今回の発表では、先行研究の知見に基づいて、内的な働きかけとしてのエージェンシーと、外的な働きかけとしての時間的展望をアイデンティティ形成における促進的な要因とし、短期縦断研究により関連性を検討しました。先生方から、アイデンティティ研究領域に関する最新の研究情報、分析方法、研究の不足点、これからの研究課題などについて、貴重なご意見とご指摘を頂きました。まだまだ大学院生の私にとって、こうしたご指摘は励みになります。他に、「青年心理学研究法セミナー」、「大会準備委員長講演」、「シンポジウム」に参加し、最新の研究情報と研究動向を把握でき、実りの多い学会になったと思います。

学会に参加し、日本の文化を体験できることも一つの楽しみになります。一回目のとき、指導の先生と一緒に夜の新幹線で京都に向かい、初の駅弁をご馳走になりました。今回は、池袋の立教通り沿いにあるそば屋で、初のそばいなりをいただきました。二日目の午前中に研究発表を行い、昼ご飯は同じゼミの皆さんと一緒に立教大学正門前の人気カフェでオムライスをいただきました。研究発表を終えて、ほっとしたからかもしれないのですが、その日のオムライスはすごくおいしかったです。このように、一つ一つの思い出を重ねていくところが、学会活動の興味深いところだと感じております。最後に、先生方から貴重なご意見とアドバイスを頂き、心から感謝の意を表します。

ロングセッションの発表を終えて

風間 惇希（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

研究者としてまだまだ未熟な私にとって、青年心理学会第23回大会で自身の研究を発表させていただいたこと、さらにはロングセッションという枠を頂いて先生方と議論できたことは、とても有意義な経験となりました。研究に関して口頭発表するのが今回初めてだった私としては、いきなりロングセッションで発表するという試みはかなり挑戦的なものでしたが、今こうして振り返ってみると「やってよかった」という満足感が強く残っています。また同時に、先生方からのご意見を通じて、研究として不十分な点や自身の勉強不足を痛感させられ、「今まで以上に研究に励まねば」とも強く感じています。

今回の発表内容の中心的テーマであった『過剰適応』という構成概念には、常に定義の問題がつきまといっており、先生方からもその点に関してたくさんのご指摘を頂きました。何をもってして『過剰適応』なのか。その問いに対する明確な答えを出せないまま、ただただこれまでの過剰適応研究に一石を投じようと意気込んでいたところを、冷静になって立ち止まり、まずは足元の概念そのものについて見直す機会になりました。

また、私自身十分処理しきれずにいた膨大なデータや変数の分析の仕方についても、様々な視点からご意見をいただくことができ、本研究のデータをどう見るのか、延いては今後の研究をどういった視点で進めていけばよいかに関して、重要な示唆を与えてくださったように思います。

他にも今回の発表を通じて感じたことが、本稿には書ききれないほどありました。それもひとえに、ロングセッションという枠をいただき、研究発表や先生方との議論ができたからだと思います。今後の研究をよりよい方向に進めていくためにも、今回いただいた様々なご意見をうまく自分の中に取り入れながら研究活動に邁進していこうと思います。最後に、以上のような今後の私にとって貴重な財産となるような機会を与えて下さった全ての先生方に、心より御礼申し上げます。

日本青年心理学会第23回大会に参加して

竹元 雅也（首都大学東京大学院）

去る日本青年心理学会第23回大会にて、初めて学会参加をさせていただき、重ねてショートセッションでの発表をさせていただきました。

私自身が日々行ってまいりました研究の成果を発表させていただきます貴重な機会を頂きましたことを、この大会の開催にご尽力いただきました先生方に深く感謝いたします。

当日は大会準備委員会の方々にも、私の発表準備等の不慣れな点に関してお力添えをしていただきました。そして、当日司会を担当して下さった広島大学の杉村和美先生が発表前に声をかけて下さり（私の発表前の緊張が和らぎました）、発表後も個別に丁寧にご指摘や今後の研究についてアドバイスを下さいました。頂いたアドバイスに非常に勇気づけられ、今後の研究へのモチベーションとなりました。紙面にて恐縮ですが、重ねて感謝申し上げます。

発表では、45分（30分+質疑応答15分）という時間設定でした。フロアの会員の皆様にも、私の未熟な研究報告を丁寧に熱心に聞いて頂き、様々な角度からご指摘やご指導を頂きました。私自身では盲点となり気づかなかった点や今後の研究を抜本的に見直していくための大きなヒントが得られました。今後も熱心に丁寧に聞いてくださる皆様の

期待に応えていけるような研究報告を発表していけますよう努力をしてまいりたいと思う所存です。

様々書かせていただきましたが、初めて参加させていただいた日本青年心理学会を振りかえると、素朴で温かい雰囲気が大会全体そしてそれぞれの会員の皆様に感じられ、私もとても心地よく参加させていただくことができました。

私もこの日本青年心理学会で、参加や発表を続けていく中で、この雰囲気を作り出す一員になっていければと思っています。

しばらく寒さの厳しい時期となりますが、自己研鑽に励み、研究生活を1つ1つ前へと進んで参りたいと思います。

皆さま、またの機会によりしくお願いいたします。

第23回大会を終えて

今井 美智子（立教大学 学校社会教育講座）

この度の日本青年心理学会第23回大会では、大会準備委員として参加させていただきました。一準備委員として、至らないところも多くあったかと思いますが、天候の悪い中ご参加いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

私は、大学院生のころから日本青年心理学会の大会へ参加させていただいております。今回は初めて大会準備委員をつとめるということで、今までとは少し違う形で参加させていただきました。

日本青年心理学会の大会の印象は、初めて参加した院生の頃から変わらずに私の中にあります。それは、発表時間が長く充実していること、参加することで自分自身の興味が広がり、とてもわくわくできる場であること、懇親会では一院生の私でも多くの先生方とお話できる機会をいただけたり、その地域のことを深く知ることのできるイベントがあったり…と、2日間が非常に濃い密度で過ぎる、そんな印象です。

本大会は、今までたくさんの学びを得て楽しく参加できていたことが、実は、大会準備委員の皆さまのお力のおかげであった、ということに多く気づいた大会となりました。

そしてさらに、自らの研究姿勢を振り返ることのできる大会でもありました。なかなか発表をするという段階まで研究を精査しきれないところもありますが、やはりこの日本青年心理学会で発表をして自分の研究を磨いていきたい、そんな気持ちになりました。自らの研究姿勢を問い直し、研究への動機づけが高まった、そんな変化をもたらした大会であったようにも感じました。今後でもできるだけ多く大会へ参加をし、興味を広げていきたい、と強く感じています。

最後に、このような気づきを残す機会を与えて頂きました、ニューズレター編集委員の皆さまに御礼申し上げます。ありがとうございました。

<書評：私のおすすめ、この一冊>

『アディクションとしての自傷「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理』

松本 俊彦(著) 星和書店(2011年刊)

安東 友子(横浜市立大学保健管理センター)

先進国の中でも日本の自殺率は高いことが知られており、2006年より国を挙げて自殺

対策を行っている。対策が功を奏したのか、近年自殺者数は減少傾向にあるが、一方で若年層の自殺者数の増加が深刻な問題となっている。評者は自殺対策研究に従事しており、臨床心理士として大学病院救命救急センターでの自殺未遂者ケアを担当してきた。臨床経験から、若年層の自殺と自傷は切り離すことのできない問題であり、青年期の危機的問題であると考え、本書を紹介したい。

著者は自傷行為や依存症を専門とされている、精神科医の松本俊彦氏である。自傷は「死にたい」という気持ちとは異なる感情から端を発する行為であるが、結果として自殺に結びつく危険性を孕んでいる。著者は、自傷は「死んでしまいたいくらい耐えがたい、心の痛みを緩和する試み」と説いている。つまり自傷は「生き延びるため」の行動として用いられているのである。これまで「周囲を振り回す行動」「パーソナリティ障害患者の問題行動」と扱われてきた自傷行為は、実は「不快気分への対処として」用いられた、生きるための手段なのである。そのため、つらい感情が起こる度に、自傷の持つ「不快気分緩和効果」を求めて、自傷行為を繰り返すようになる。しかし次第に鎮痛効果への耐性が高まり、効力が消失するため、自傷行為はエスカレートし、結果として自殺に至ってしまうというメカニズムである。

著者の説は、知識と豊富な経験に基づき、これまでの自傷概念を根底から覆すものであると筆者は考える。我々は青年と関わる者として、その心理を読み解こうとする者として、現代青年の行動の背景にある病理を理解する必要がある。そして自傷行為を繰り返す青年に支援者として関わるためにも、本書は必読であると考え。

<広報>

ニューズレター電子化のお知らせ

青年心理学会ニューズレター編集委員会
委員長 小沢 一仁

青年心理学会では、青年心理学に関する内外の情報や、学会各地の研究会の動きなどをお知らせするニューズレターを毎年3回発行していますが、平成28年度よりこれを電子化することとしました。つきましては会員の皆様にご説明申し上げるとともに、ご協力をお願い申し上げます次第です。

1. 電子化の経緯

本学会は、平成26年度・27年度の総会で説明がなされたように、収入の大幅な減少による財政危機の状況にあります。そのため、学会の活動については、その質を高く保ちながら効率的に行うことが必要です。そのための方策を検討する中で、これまで紙媒体で発行してきたニューズレターを電子化し、学会ホームページに掲載することとしました。これによって、発送費及び発送のための作業費を大幅に抑えることができます。

2. 電子化の形態

当面は学会ホームページに掲載します。ニューズレターの目的を十分達成するためには、会員がホームページに自らアクセスして閲覧するより、学会からの配布、配信の形でお届けすることが本来望ましいと考えています。しかし、電子媒体による配信（例えば、メールマガジンの発行、メーリングリストによる送信）には、情報管理の徹底、スパムメールなどの問題への対応など、十分な準備が必要となります。財政問題が喫緊の

課題であることを鑑み、まずはホームページでの掲載という形を選択しましたが、引き続き会員の皆様にとってより便利な配信方法を継続的に検討し、しかるべき時期に切り替える予定です。

3. 個人情報の掲載について

これまで会員異動の情報（氏名、所属、研究テーマ）を掲載してきましたが、ホームページは会員以外も閲覧可能であることから、掲載を行わないこととしました。今後会員情報をどのような形でお知らせするかは常任理事会で検討中です。決定次第お知らせします。

4. 電子媒体にアクセスできない会員の皆様へのお願い

ホームページ等の電子媒体にアクセスできない方には、これまで通り郵送します。お手数ですが、氏名、所属を明記し、2016年3月31日までに書面にて申し出て下さい。

宛先：〒739-8524 東広島市鏡山 1-1-1 広島大学大学院教育学研究科 杉村和美

5. 電子化にあたってニューズレター編集委員会からのメッセージ

電子化をきっかけとして、ニューズレターをより読み応えのあるものにしていきたいと考えています。これまで同様、学会会員からのご意見や情報も掲載します。積極的に活用して下さい。

事務局からのお知らせ

I. 2016 年度第 24 回大会について

今年度の第 24 回大会は下記のとおりで開催されます。詳しくは同封の一号通信をご覧ください。みなさまからの参加と発表申込みをお待ち申し上げます。

開催場所：滋賀大学教育学部

大会委員長：若松養亮（滋賀大学教育学部教授）

日時：2016 年 11 月 26 日（土）～27 日（日）

問い合わせメールアドレス：wakamatu@edu.shiga-u.ac.jp

II. 2016 年度からの新役員体制

昨年夏に行われた役員選挙の結果を受けて、前大会時に開かれた新理事会において、2016 年度からの新役員体制および常任理事の役割分担を下記のとおりといたしました。理事長指名の常任理事 1 名が加わっています。

理 事 長 大野 久（立教大学）

常任理事 小塩 真司（早稲田大学）

佐藤 有耕（筑波大学）

白井 利明（大阪教育大学）

平石 賢二（名古屋大学）

溝上 慎一（京都大学）

三好 昭子（帝京大学短期大学部）

若松 養亮（滋賀大学）

: 広報・ニューズレター担当

: 機関誌担当

: 研究担当

: 国際交流担当

: 事務局

: 事務局補佐

: 大会・出版企画担当

理 事 浦上 昌則（南山大学）
後藤 宗理（椙山女学園大学）
杉村 和美（広島大学）
高木 秀明（横浜国立大学）
都筑 学（中央大学）
監 査 伊藤美奈子（奈良女子大学）
伊藤 裕子（文京学院大学）

* 敬称略、理事長以外は五十音順

* 任期は通常の理事と同じで、2016 年 4 月 1 日から 2019 年 3 月 31 日までです。

* 事務局は引き続き溝上が担当いたしますが、2017 年度の年会費の納入、入退会処理は三好昭子先生に事務局補佐としてお手伝いいただきます。

III. 会員異動

2016 年 1 月 27 日現在で会員は 402 名（うち名誉会員が 3 名、2015 年度末退会予定者を除く）となります。

IV. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。